

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第二号



ことばとその周辺

第二回

仙台周辺で広く文学にかかわる活動に取り組んでいるグループを、紹介するコーナーです。

三十数年続く 集団読書の楽しみ

花村清「ゲルマニウムの夜」、北村薫「冬のオペラ」、浜辺祐「こちら救命センター」…課題図書のリストに並んだこれらのタイトルから、この読書グループの構成メンバーを想像するのは、正直言って難しい。

「普段、自分から進んで手にとらないだろうなあ」という作家やジャンルの本が課題になることもしばしば。それでも「読んでよかった」と思うことが多いですね。もちろん「あれー？」という読後感の作品に当たることもあるけれど、読まな

いよりは読んでみた方がよい。けつして損をした気分にはなりませんよ」と菊地栄子さん。始まりは、テレビの登場による活字離れを危惧した河北新報社が、読書サークルの活動を呼び掛けたこと。一九六四（昭和三十九）年、菊池之雄さんらメンバー三十六名が会を立ち上げた。

メンバーの個性は様々だけれど長く続いていこうと、「ふんわりグループ」と名付けた。その願いがかなって、三十年以上も続いている。その間、昭和四十五年度の読書週間には優良読

読書グループ「ふんわり」

書グループとして表彰された。

互いに年齢も家庭のことも知らない同士が、月一回のこの時間を集りに集まった。時間の半分は読んできた課題作品について思い思いに感想を述べ合い、残りの半分は「ダバペリ」と称して自由なお喋りを楽しんだ。あらためて「読書とは？」と構えることもなく、「この本を読んでみようよ」「読んで来なくてもいいよ」という、ゆるやかな集い。純粋に読書を媒介とした人間関係がそこにはあった。

「女性の感覚は鋭い、すばらしい、と痛感しました」と元代表の菊池之雄さんが振り返る。「それぞれの（読み方）を開陳し合う場。意見が違っても合わせる必要はない。ここにきて、とにかく何か一言でも発言をしてみることに。丁々発止のやりとりで刺激し合ううちに、互いの理解が深まったんです」

「発足して三十年以上も経ちメンバーも徐々に高齢化。そんな事情もあって、元気なうちに区切りをつけようよ、と実

は九十五年に記念誌を発行して解散したんです」と浦山文一さん。「でも、解散したものの、長年集まってきた仲間には離れがたく、引き続き十人ほどの元メンバーが今も集まって、読書会を続けています」

これからは、新しい世代の人たちとも一緒に読書を楽しんでみたい。メンバーはそう考えている。ドアはいつでも開かれています。

●参加申し込み/問い合わせ先
千九八〇〇〇三三
仙台市青葉区五橋二八七四〇一
電話（〇二二）二六七五一九四
浦山文一「ふんわりグループ」



左から、浦山文一さん、菊池之雄さん、菊地栄子さん

文学館のイベントから

EVENT REPORT

講演会「新生」の時代

四月二十日

講師・井上ひさし
井上館長が、藤村の代表作「新生」に焦点を当てながら、藤村文学とその周辺について語りました。当日は馬籠にある藤村記念館の牧野副館長にもご来聴いただきました。

第五回「ことばの祭典」短歌・俳句・川柳へのいざない

六月二十日

三部門合同の当日吟行会「ことばの祭典」も今年で五回を数えます。今回の題は「屏」と「土」でした。折しも特別展「島崎藤村展」開催中で、藤村の作品にちなんだ投句も見受けられました。参加者が選ぶ「あじさい賞」も好評でした。

講演会「おと、絵本痛快よ語りの旅で！」

七月二十日

講師・飯野和好氏（絵本作家）
飯野氏が「ねぎぼうずのあきたろう」をはじめとする自作絵本を読み語りました。当日の飯野氏は笠・脚絆・草鞋といういでたちで登場。文学館職員も浴衣姿で盛り上げ、予定の時間を超える大熱演に、会場は大喝采でした。



八月七日

朗読と音楽の調べ

出演：相田雅美氏（演奏家）前田優作氏（俳優）宇都宮理人氏（作曲家）
「よだかの星」「星めぐりのうた」などの宮沢賢治の作品の朗読にあわせて、二



朗読と音楽の調べ

今後の予定

特別展「中原中也展」汚れたつちまつた悲しみに…
九月二十日（土）～十月二十日（日）
中也の自筆原稿や日記など、充実した資料でその詩の世界をご紹介します。また、中原中也賞を受賞した和合亮一氏とたけだこうじ氏による中也作品のリーディングも開催します。

企画展「現代少女詩・童謡詩展」

十一月二十日（土）～十二月二十日（日）
谷川俊太郎、まこと・みちお、松谷みよ子など、第一線で活躍中の詩人の自筆作品と、書き下ろしイラストの展示で、詩の世界を味わっていただくものです。期間中に松谷みよ子氏の講演も予定しています。

仙台文学館 ニュース 第二号

仙台文学館 Sendai Literature Museum

仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020
FAX 022-271-3044

針穴写真撮影：黒田 カツオ
本文挿画：吉山 拓

ゴルフはきらいです。自分でやるうとは思わない。だいたい自分の遊ぶ道具を他人に持たせて平気なところが気に入らない。ゴルフ場とそこに使う芝生の畑だけ、奈良県の二倍も場所を取るスポーツが、この狭い日本で許されるはずがないと思うので、ますます気に入らない。しかし最近、中島常幸というプロゴルファーの発言に感心しました。

中島さんは、ひとこころ飛ぶ鳥を落とすほどの名ゴルファーだったそうですが、その後、長いスランプにおちいった。そして最近、目覚ましい勢いで復活をなしとげたいらしい。その中島さんが、「週刊東洋経済」七月二十七日号でこんなことを云っていました。

〈去年に戻りたいと思っても戻れない。昨日に戻りたいと思っても戻れない。じゃあ何ができるかというと、明日こういう自分になりたい、明後日こういう自分になりたいという計画、目標を立てて、今日どう生きるかということなんだ。それしかなかった。〉

これは名言ですね。

日本も世界も先行き真つ暗ですが、それはたぶん、明日はこういう日本になってほしい、明後日はこんな世界であってほしいという目標がないからでしょう。そんなことを云ったって、個人の力ではどうにもならないという声が聞こえてきそうですが、少なくとも、日本の先行きについては、私たちはそれぞれ一億二千万分の一の力を持っているのですから、どうにもならないということはないと思います。

仙台文学館 #1154

『影をなくした男』

アーデルベルト・フォン・シャミツソー作



影をなくした男
シャミツソー作
池内紀訳
岩波書店刊

「影」といえば、記憶は幼年
期までさかのぼる。

明治末年、私の生まれたのは父の任地であった当時関東州の旅順(今日の中国大連市旅順口区)で、小学生のころ大正八年父の死亡によって母と共に本籍地広島県に帰ってきたが、生前の父は小学生の私をつれて野外で演ぜられる影絵芝居を見に行ったものである。

旅順郊外の小高い丘にある一面の黍畑の中に棒を二本立て、幕を張ってそこに影絵が映し出された。操り人形の黒い影がドラ、太鼓、笛などの伴奏で動き廻り、その物語の人物の抑揚のある科白が語りつづけられた。

黍のそよぐ畑、星月夜の下で幻想的な影絵に魅せられたように佇んでいた幼年の私が今でも思い出される。黒い影絵のイメージは、心の中に刻みこまれて忘れられない。

それから十数年後のこと、旧制高校の生徒だった私は、中

生のころから作りつづけていた短歌の勉強のため「アララギ」という歌誌に入会し、その同人の中村憲吉先生の選歌指導を受けることになった。昭和五年、先生を訪ねて作歌の話をうかがった時、思いがけなく「影」ということが話題になった。

「君たちは物を写すのに正面からだけ見ているから行きづまってしまう。その物を前からだけでなく、上から下から、横から裏から、さまざまな角度を換えて見れば、同じ物でもいろいろな形や姿を表すものだ。さらに言えば、その物の影も見落してはならない。影は光を受けて投影された偶像であるが、そこには生命がこもっている。影もまた本体である。」

これが私の初めて聞いた影像写真説であり、作歌の要諦でもあった。「影は仮象でありながら、まさにその物の本質の照射された表現に他ならない。」大学在学の時文学部の講義でドイツ文学史を聴講した

ところドイツ・ロマン派の紹介があり、その中に「影」の話が出てきたので思わず聞き耳を立てた。フランス系ドイツ人のシャミツソーという作家の「影をなくした男」(一八二三年作)のことであった。

作品の主人公シユレミールが長い船旅から帰って知人を訪ねたところ、そこで一人の灰色の服をまとい、「もの静かな、長身瘦身の、かなり年とった男」に出会った。これが「影」を買い取る悪魔の化身であった。その甘言にのせられて、自分の身につけていた「影」を売ることになった。「いと鮮やかな手つきで私の影を頭のてっぺんから足の先まできれいに草の上からもち上げてクルクルと巻きとり、ポケットに収めました。」その代償として、金貨でも何でも思い通りに受け取ることができた。



或る日のこと、戸外に出て歩いていると、「この人には影がない」とさわがれ、不思議に思

った学校帰りの子供たちに追いつけられ、影の写らない木かげや軒下を歩いて人目につかないように心がける。月明の夜はことさらに忍ばねばならない。「月の輝いている時、夜ふけを待つて大きなマントに身をつつみ、目深く帽子

をかぶると罪人のようにふるえながら住居をあとにし、しばらくは建物の影づたいに進んだ。」欲しいものは何でも手に入れることができるのに、自分の影のない悲しみに打ちひしがれる。「影」は虚像ではなく、人間の魂そのものである。シャ



ミツソーは心理の「潜在的自我」として「影」をとらえ、悪魔に魂を売った男の寓話としてこの「影をなくした男」を書いた。

この小説が岩波文庫の「影をなくした男」(井汲越次訳)で刊行されたのは昭和十一年、私はすでに大学を卒業していたが、講義のことが頭にあったので、さっそく買って読んだが、その本はどこかで見失って手元がない。文庫の二代目として昭和六十年刊行された池内紀訳「影をなくした男」を今机上にひらいている。「影は魂そのものである。」「影も本体である。」という意識を植えたものとして、この「影をなくし

た男」は忘れることのできない一冊となった。私の学問的専攻は国文学の研究、ことに万葉集を中心とする古代文学で、多年教室で講義したり論文を発表したりして来たので、研究はいわば私の「生」の光に当たる部分といつてよい。それに対して、学生時代から作りつづけた短歌の創作は、私の心象となった人生や自然の相を言語で表現したもので、すなわち影の部分となるであろう。生きた人間が「影」を

つねに伴っているように、私の「光」とも考えられる研究(学)も、それと相重なって「影」の創作(芸)と一体のものでなければならぬ。「影」も本体であるように、私の短歌の創作は私の本体の代償ともいえるべく、私はこの「影」を同伴者として生きつづけることである。



扇畑忠雄(歌人)1911年、旅順生まれ。本籍広島県。東北大学名誉教授。前日本現代詩歌文学館長。歌誌「群山」主宰。80年河北文化賞。96年現代短歌大賞。「扇畑忠雄著作集」その他著書多し。



お互いを描いた似顔絵。左がへき、右が富弥。

スズキヘキと天江富弥の似顔絵

田中 朋子 (仙台文学館学芸員)

スズキヘキと天江富弥がお互いを描いた似顔絵がある。ヘキの夫人鈴木あひ氏の所蔵で、当館でお借りして展示しているものである。仙台の童謡運動は、この二人が結成した「おてんとさん社」から始まった。ヘキ(本名:鈴木栄吉)と富弥(本名:天江富蔵)はともに、明治三十二年仙台市に生まれた。ヘキも富弥も当時、「赤い鳥」に刺激を受け、「金の船」や「おとぎの世界」に投稿していたが、推奨欄に作品が掲載されるヘキにあこがれた富弥が、大正九

年の春に仙台のヘキに手紙を出したのが、その後五十年に渡る二人の交友の始まりだった。志を同じくする二人の文通は大変熱心なもので、会う日を楽しみにしていた様子はまるで恋人同士のようにであった。この頃のことを後にヘキは、「恋人の如く若々しい胸を痛め痛撃と希望で人生の最大の喜びに、日々を忙しく生きた」と振り返っている。この二人の友情と童謡に対する情熱が、翌大正十年「おてんとさん社」の創設へとつながり、童謡専門誌「おてん

とさん」が発刊されたのである。この雑誌には野口雨情、山村暮鳥などが協力し、宮城の児童文学の歴史を振り返る上で貴重な資料となっている。天賞酒造の次男坊であった富弥は、おてんとさん社の活動及び雑誌の発行を援助するなど、物質的な側面での働きも大きかった。ヘキの童謡や詩の、独得な調子と趣のある世界を愛した富弥は、ヘキの創作への情熱を支え、ヘキもまた富弥を信頼し、その友情の中で自らの信じる詩を作り続け



スズキヘキ(右)と天江富弥。

ることができた。創作に没頭するヘキと、編集・出版など幅広い文化活動の中心的担い手となった富弥。この両輪があって「おてんとさん」の世界が生まれ、現在に残っているといえよう。この似顔絵に、その象徴を見る思いがする。

『明治の文人達 藤村を中心に』

嵐山光三郎



「島崎藤村展」会場にて

こんにちは。先ほど展示を見せてもらったんですが、これだけ島崎藤村の資料を揃えているのは今までなかったですね。馬籠の記念館でさえ、これほどは展示していません。すごく良く整理されていて、例えば書簡とか手紙とか、私も初めて見る物もありました。皆さんもこれは滅多に見られないから、もう一度よくご覧になったほうがいいと思います。

藤村を語る時、僕は思い出がありまして。高校時代に国語の先生が「自然主義は日本の文学史上にいない。藤村と田山花袋、これは日本文学史の汚点だ」と言ったので、ビックリしたんです。

それまで私が藤村に接していたのは詩集の『若菜集』。中学のときにみんな読んでたんですよ、「初恋」っていう有名な作品。

まだあげ初めし前髪の前髪の前髪に見えしとき、花ある君と思ひけり

うまいですね。僕なんか特に男子校だったからね、ポニーテールに髻なんかさしてて女の子がいると、「これが初恋かなー」なんてね。だから、こんな詩人をなんでそう悪く言うのかなっていうのは自分としてはわからなかったわけです。

藤村は明治五年生まれで、田山花袋は藤村の一歳年上。誰もが知ってる作品『蒲団』は明治の文学としては非常に衝撃的な内容で、『破戒』と同じ明治四十年に出たんですけど、その時の文芸時評では『蒲団』の方が評価が高かったですね。

明治の作家で当時藤村の周りにいた大物としては、慶応三年つまり明治元年生まれで藤村の五歳年上に当たる夏目漱石。漱石の同級の正岡子規。『五重塔』の幸田露伴も漱石と同じ年です。森鷗外も慶応、年上です。

もうちょっと年上には坪内逍遙。彼が明治十八年に書いたのが『小説神髓』。「これからの小説」というものは、勸善懲惡で

なくていい。人間の本当のところを全部書くのが小説というものだ」ということを説いた、日本初の小説論です。藤村が十三歳の時です。

この逍遙の小説論に真っ向から喧嘩を売ったのが、鷗外。一年半ぐらいにわたって『早稲田文学』誌上で繰り広げられ、後の文学史では『没理想論争』と呼ばれる、有名な文学論争です。

森鷗外をはじめ明治の作家が偉いのは、みんな喧嘩するんです。敵対することが友情であるという概念があって、論争をおおっぴらに出してそれを読者に示して、どっちが正しいかを決めてもらう。だから文学が面白かった。ダイナミックだった。

先ほどお話ししたように藤村の文学は『自然主義』と呼ばれています。もともと自然主義というのは、フランス文学——ゾラの『居酒屋』とか——あちらのほうで出来たもので、それが十五年ぐらい遅れて日本に入ってきたわけなんです。

たんです。そうして発表した『破戒』は、大ベストセラーになりました。

藤村が何だかんだ言われながらすごいのは、『夜明け前』を書いたことです。江戸から明治に移るときに、新時代に対応しきれずに死んでいった父がモデルです。変革についていけなかった人、その中で苦悩する人を書くわけです。これを書いたことが、明治の文学者として藤村がやった最大の功績だと思うんです。

また『新生』では、自身の姪との不倫関係を世間に曝け出してしまふ。そのことによって、自分というものを暴き出すとするわけです。

鷗外も、芥川龍之介も、谷崎潤一郎もそんな藤村の生き方や作品を批判しました。でも藤村は、倫理的にはとんでもないと批判されながらも、そういうふうになつてしまふ自分をも、もう一つの目で見て書こうとした。

藤村の「自然主義」は、あらゆるものの、全てのことを全部書き込まなきゃいけないと日本流にアレンジして、ちよっと勘違いしちゃったところはあります。

でも、藤村が偉かったのは、生活的には色々問題があったけれども、江戸から明治に移

る時代の地殻変動の中で揉まれていく人間を、自分をも実験台として書いたことなんです。

藤村がここの仙台、東北学院に赴任したのは二十四歳の時です。そしてここで『若菜集』を発表しました。

東北学院の給料はあんまり良くなかった。しかもこの仙台に来るまでに大きな事件がいくつもあって、藤村にとって大変な時期だった。

親友で、自然主義の同志でもあった北村透谷の自殺。初恋の女性、佐藤輔子の死。家庭的にも非常に問題がありました。二年前に長兄が逮捕・投獄。次兄は遊郭に通って梅毒をうつされて廃人同様に。父親の正樹は、明治の新时代に対応できず、座敷牢で死ぬ。母は不貞に走る。

そんな時期に発表されたのが『若菜集』でした。その詩を生んだ土地が仙台です。つまりこの仙台の透명한光

自然主義が台風のように日本中で猛威をふるったのは明治四十年頃、藤村が三十五歳『破戒』を書いてからです。『破戒』では、自分のことをこれでもかこれでもかかって告白します。キリスト教の告白のように、自分のことを書くわけです。そこまで書いた小説はそれまでは無かったわけですから、大変な衝撃を与えた。

発表の手段も画期的でした。今と違って、印税制度がなかった時代です。たとえベストセラーになっても、原稿は買い切りなので文士の生活はちっとも楽にならない。儲かるのは版元ばかり。藤村の『若菜集』もそうでした。そこで藤村は、緑蔭叢書という出版社をつくる。義父や友人から借金をしてね。勝負を賭け



嵐山光三郎（作家）1942年東京生まれ。國學院大学国文学部卒業後、平凡社に入社。『太陽』編集長を経て作家として活躍。88年には『素人抱丁記』で第4回講談社エッセイ賞、98年には『文人悪食』で第19回日本雑学大賞を受賞。『ざぶん』『追悼の達人』『美妙消えた』等、著書多数。



「上階に図書館があることから子供向けのお話会などは開かれてきたけれど、<ことば>をテーマとした大人向けのイベントは今回が初めて。とても刺激になる」と、企画・活動支援室長の佐藤泰さんは期待する。「外に開かれた、固定でない空間。異質なものが共に出る可能性をもった場。空間を共有して表現が出合う実験の場所。日本にはこれまで根付いてこなかった<広場の文化>を模索したい。ここを、そのための精神的なシンボルとして行きたい」

定禅寺通りを行き交う人々や自動車、そしてケヤキの葉が反射する午後の光が、大きなガラス窓をすり抜けて交錯した。

せんだいメディアテーク オープンカフェ

父親に手を引かれた幼女がキョトンと立ち止まる。白い丸テーブルに着席したカフェの客はコップを置いて振り返る。数十の眼が「ことば」を見つめている。

「秋の夜は、はるかかの方、小石ばかりの、河原があつて、それに陽は、さらさらとさらさらと射してゐるのであります。…」(中原中也「一つのメルヘン」より)

真昼のスクリーンにはほんやりと浮かぶ中也の肖像。ポツポツと滴る音符。立ちのぼる<声>。

「ガラスとコンクリートと金属がむき出しになっているメディアテークの無機質の空間を、<声>という有機的なもので満たしてみたい」と語るのは、この日、リーディングのステージに立った、詩人のただこうじさん。「そういえば、中也の詩にも無機質と有機質が混在している」

「オープンカフェ」は、せんだいメディアテーク一階のオープンスクエアにカフェの空間を設定して、毎月さまざまなジャンルのイベントを織り交ぜながら公共空間の使い方を模索する試みだ。



せんだいメディアテーク 〒980-0821 仙台市青葉区春日町2-1 電話 022-713-3171 ホームページ <http://www.smt.jp/>

詩人・富永太郎の出發

赤間 亜生 (仙台文学館学芸員)

仙台に学ぶ

富永太郎は、明治三十四年五月に東京で生まれた。幼い頃から勉学優秀で、絵に親しむ利発な少年であった。大正八年に旧制第二高等学校に入学した後、油絵のほか文学にも興味を持ちはじめ、フランス語を学び、ボードレールの詩を読みはじめる。だが、やがて知り合った開業医の妻と恋に落ち、それがきっかけで大正十年末に退学、仙台を離れることになる。しかし、この仙台での青春が、その後の詩のテーマに深い影響を与えている。



富永太郎 (1901-1925)

当館では、この富永太郎が仙台時代に使っていた画帖をは

じめとする、いくつかの自筆資料の複製資料を所蔵している(原資料は神奈川近代文学館所蔵)。これらの資料からは、若くしてこの世を去った、詩人の出発点が見えてくる。

資料の一つである画帖は、富永が旧制二高に在学していた、大正八年〜十年頃に使用されていた。

当館が複製制作したページには、ボードレール、ヴェルハーレンらの詩の英訳の抜書きが記されている。ボードレールの引用には次のようなものがある。

① I pass the abysmal seas

That are when calm, the mirror level and fair
Of my despair!

— Baudelaire.

測り知れぬ深淵の上に、私を描く。またある時は、平らかな風、わが絶望の、大いなる鏡！

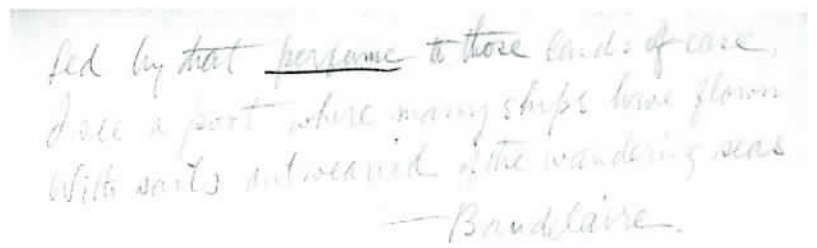
② Led by that perfume to these lands of ease,
I see a port where many

ships have flown

With sails outwinded of the wandering seas.

— Baudelaire.

(原詩日本語訳) ころよい風上の方へと、きみの匂にみちびかれて、私は見る、



海原の波に揺られて今もなおおれ心地の帆や帆柱に、満たされた港を。

※原詩日本語訳は、いずれも阿部良雄訳『ボードレール全集』1(一九八三年、筑摩書房)に拠った。

富永が仙台に学んだころ、ボードレールのまじまった日本語訳詩集は出版されていない。また、大岡昇平によれば、富永は仙台時代にフランス語の初歩を独学で始めたばかりであり、この頃はおもに英訳を愛読

していたらしい。この引用は、

The Walter Scott Publishing から一九〇六年に刊行された、F.P. Sturmによる訳詩集『The Poems of Charles Baudelaire』に収められている『The Flowers of Evil』(悪の華)中の詩の一部分を抜粋したものである。スタートムの英訳はこの時期、日本に最も広く流布したものであり、富永の蔵書にも、カナを振ったこの本があったという。

①の「音楽(Music)」(原題:『La Musique』)は、音楽を海になぞらえ、船出の喜びと期待(理想や希望)をのせるものとして海を描きながら、後半、その陶酔と高揚は苦悩へと転化し、最終的には海が絶望を映す鏡になってしまうという詩である。②の「異国の香り」(Exotic Perfume) (原題:『Parfume exotique』)では、心地よい「香

り」に誘われて「私」が眼にする、現実世界を没却した理想郷としての「異国」の光景が、描き出されている。

フランス象徴詩への深い理解

富永が引用しているのは作品の一部分であるが、①は海が絶望の象徴に変化する最終連、②は「安息の地」へと「perfume」によって導かれてゆく場面を描く連で、それぞれ「理想」と「現実」を象徴している部分であることは興味深い。フランス象徴詩の一つの特徴として、ボードレール「悪の華」の「憂鬱と理想」という章題に示されているように、現実への激しい嫌悪感の中で、そこに生きる憂鬱と絶望を詩に形象化する一方で、その様な現実からの逃避場

所としての、理想的な彼方の世界への志向を、詩に表現するということがあげられる。上記のボードレール引用から、富永がフランス象徴詩というものを、深く理解していたことが改めて認識される。

もう一つ興味深い引用に、ベルギーの詩人、ヴェルハーレンの『Le Roc』(「岩」、詩集『黒い松明』所収)がある。ヴェルハーレンは、初期の作品では象徴派的な主題をうたっているが、後期は祖国への愛と文明批判を主題とする、社会主義的詩人へと変化した。

— Verhaeren.

こ、ぞ吾が魂の育ちし所なれ、かたれよ、われ此の後も独りかや、吾が魂を伴侶として？

わが魂よ、あはれ！黒檀の館にて、

夜となれば音もなくひび入るなり

わが望の老いたる鏡は。

これは、日本語で筆写されている。この時期、日本にもヴェルハーレンの作品を含むフランス詩の英訳のアンソロジーがもたらされているが、それらの中に本作品は見出されないようである。また、先述したように、この時期の富永にはまだ、充分な翻訳ができるほどのフ

ランス語の語学力はなかったのではないかとも思われるのだが、「エベイス(ébeine)」とふりがなが振ってあるのは、フランス語に基づいた訳であるということを推測させる。当時、日本で出版されていたフランス文学史の本や研究書に、上記の作品の訳が掲載されていた可能性が大きい。現段階では未確認である。

この詩は、人から見捨てられ、忘れ去られた海辺の岩に、詩人が自己の魂の根源的な姿を見出しつつ、夜の訪れとともに深い闇に覆われる中で、その岩を自分の墓標として捉えてゆく。富永によって引用されているのは、孤独と絶望に満ちた生のある様子を、象徴的に描き出した一節である。この詩はヴェルハーレン初期の象徴詩の時代の作品であり、ここからも、仙台時代の富永が象徴詩の詩風に、強く心をひかれていたことを改めて確認することができるのである。

中也に大きな影響

富永は、京都の友人のもとに滞在していた大正十三年、立命館中学に在学していた中原中也と出会っている。その頃一世を風靡したダダイズムの詩に魅せられ、みずからダダ風の詩を書きはじめ「ダダさん」と



中原中也 (1907-1937)

も呼ばれていた中也にとって、六歳年長の富永は初めて出会った生身の「詩人」であった。富永からもたらされたフランス象徴詩との出会いによって、中也の詩はダダイズムの詩風からさらに広がり、後年にはランボオの翻訳も手がけることになったのである。

中也は死の前年(昭和十二年)に記した『詩的履歴書』で富永について触れ「彼より仏国詩人等の存在を学ぶ。大正十四年の十一月に死んだ。懐かしく思ふ。」と記しているが、これらの自筆資料は、中也にフランス詩の感動を与えた、先駆者・富永の出发点を示している。



ランボオ詩集

中原中也訳『ランボオ詩集』(昭和12年9月、野田書房)

※本稿は、特別展「中原中也展」汚れつちまった悲しみに、「図録」執筆したものに加筆・訂正を施したものです。